TEAM NAKACHU

四万十市立中村中学校
主幹だより　No. 5
２０２１・６・２８

「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト
～２つの教材研究会 ＆ 教材研究会に向けた教科会の取組より～

理科　教科会

国語科　教科会

先日、本校が今年度受けている指定事業「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクト」の「実践研究協働校事業」と「授業づくり講座」、２つの教材研究会が行われました。前者は「国語」、後者は「理科」です。

両教科とも教材研究会に向けて、何度も何度も単元構想についての検討会が行われていました。「実践研究協働校事業」については「小学校との９年間の学びをどのようにつないで資質・能力を育むか」が研究の１つに挙げられています。そのため、中村小学校の教材研究会や授業研究会で講師の齊藤一弥先生からご指導・ご助言を受けたことをもとに、中学校の単元構想や小中の見方・考え方の系統表などを短期間で何度も修正をかける姿がありました。

日頃、各教科の教科会に参加させていただいて感じていたことでもありますが、今回改めて感じたことは、１つの単元や作成物について教科会でじっくり何度も検討を重ねることを通して、自分たちの教材を見る目や単元を構想する力等が養われているということです。また、検討を重ねることを通して教科内で授業づくりの意識統一が図られ、それが授業の質の向上や授業力の向上につながり、教科会としての強みになっていっているということを改めて感じさせられました。

齊藤一弥先生　（島根県立大学教授･高知県教育課程推進専門官）からの学び（午前･午後終日のご助言より）

指導者としての心構え

◆教科指導のプロとしての自覚を持ち、生徒の有能さを引き出す授業を実践する。（「プロとしての自覚」については午前、午後を通して齊藤先生から何度も言われていたことです。）

教科指導や単元を構想するにあたって

◆教科の本質に迫る。生徒は教科の本質に迫らないと（教科の本質を見せないと）満足しない。

◆中３のその先を見通す。高校の内容を理解しておくと中学校の学びがひらく。

◆多面的・多角的に分析・判断できる子供、批判的に思考できる子供にする。そのためには事実や原因を伝えられることや情報を取捨選択できるようにすることが大切である。そのような力を付けることで説得力のある説明をすることができるようになる。

◆生徒にとって解決したい切実感や必然性のある言語活動を設定する。生徒にとってアップデートが必要となる切実さがあることで能力は高まる。そのためには単元を通した仕掛け・仕組み ＋ 仕込みが必要となる。

小倉恭彦先生　（国立教育政策研究所　学力調査官）からの学び（調査官のパワーポイント資料参考）

目標の設定に関して

◆目標は、課題を解決することの先にある、これから出会う未知の課題を解決するときに生かせる本質的なものを目標とする。

◆生徒にどのような事象を見たり考えたりできるようになってほしいか、授業後の具体的な生徒の姿を設定しておく。

評価に関して

◆「評価」とは、豊かな自己実現に向けて生徒をエンパワーメントする教育的な営みである。「人間は一人一人が本来素晴らしい潜在能力を有している」という前提のもと、その能力を能動的に湧き出させ、顕在化させることが大切である。

◆本来、C の生徒をつくらない指導をすることが大切である。そのために具体的な指導や手立てを考えることが必要である。指導と評価は表裏一体である。

課題の設定に関して

◆Why ではなく、What と How を含む問いになるようにする。生徒との対話を通して何をどのようにするのか生徒にわかるような課題（めあて）を設定する。